

地域活性化におけるエスニック資源の活用

—特集号の総括にかえて—

山下清海

立正大学地球環境科学部

本特集号は、2020年12月6日に新型コロナウイルス感染拡大の状況下で、オンライン開催となった地理空間学会第13回大会で実施されたシンポジウム「地域活性化におけるエスニック資源の活用」の成果に基づくものである。7名による発表とその後の総合討論を受けて、報告内容を加筆修正し、「地理空間」13巻3号（オンライン号〔電子版〕）の特集号に投稿した。

本来ならば、2020年の春休みおよび夏休みに、国内外で集中的なフィールドワークを実施する予定であったが、コロナ禍での実施は見送らざるを得なかった。各執筆者は、いずれもライフワークとして、それぞれの地域、エスニック社会について長年、研究成果を蓄積してきたため、改めてこれまで収集してきた資料、データを整理し、より深く分析しながら、本特集号の成果をまとめた。

本特集号では、7名の筆者のうち、5名が海外の事例を、2名が国内の事例を対象とした。海外、国内という地域の差はあるものの、地域活性化におけるエスニック資源の活用というテーマは、国境を越えて共通する課題である。

本特集号の「地域活性化におけるエスニック資源の活用に関する研究の意義—特集号の趣旨—」においても、エスニック資源のとらえ方について述べた。エスニック集団が有しているエスニック集団の生活様式が資源となり、地域活性化を促す場合、エスニック資源を大きく二つに分類した。

一つは、エスニック集団の生活様式が商品化さ

れ、地域の価値向上やそれに付随する経済的利益の創出がもたらされる場合である。一方、エスニック集団が保有・維持してきた生活様式は、エスニック集団成員間のアイデンティティを活性化させる契機にもなる。このようなエスニック集団の動向と結びついた地域は、経済的な側面に限らず、社会文化的な側面でも価値を向上させる。本特集号では、前者の地域活性化におけるエスニック資源の活用例のみならず、後者の事例についても着目した点は大きな特色と言えよう。

世界各地にはさまざまなエスニック集団がみられる。それらの中にはロマのように長い間、差別の対象とされてきた集団も含まれている。加賀美雅弘の「オーストリアにおけるロマのエスニック資源活用の可能性」というテーマは、負のイメージを有するエスニック資源と地域活性化を取り上げた貴重な研究といえよう。ロマが被ってきた長年の差別や暴力、排斥などの過去の「負の記憶」を、ロマ固有のエスニック資源とするならば、ロマ自身にとっても一般市民にとっても忌まわしい過去を可視化し、ロマとそれ以外の人々の間で記憶を共有することによって相互理解へつながる可能性がある」と、加賀美は述べる。ロマの自助組織が結成され、音楽祭や絵画展などのイベントの開催によって、ロマだけでなく一般市民の参加も募って相互の交流機会を増やす努力が行われている。ヨーロッパ各地で生活するロマへの差別・偏見の撤廃に寄与する研究成果が求められているの

ではないだろうか。

日本国内で長い間差別されてきたエスニック集団として、在日コリアンを挙げるができる。福本 拓は、「韓流ブーム下での大阪・生野コリアタウンの変容」について論じた。大阪市の生野コリアタウンは、2000年代以降の韓流ブームで観光地化が進んだ。福本が実施したアンケート調査からは、新たに増加した観光客は、生野コリアタウンの歴史的背景や日韓の政治問題から遊離しているものの、それらへの学習意欲が弱いわけではないこと、一方、既存の商店は、経済的価値の向上という部分では近年の変容を肯定的に捉えているが、多文化共生に資するような社会的価値に対しては、過去や現在の諸種の対立・軋轢により関与が難しい状況などが明らかになった。

生野コリアタウンは、オールドカマーのコリアン集住地区に形成された。近年はニューカマーのコリアンが開業する店舗も増えている。一方、東京の大久保コリアタウンは、ニューカマーが中心になって形成したコリアタウンといえる。川崎市川崎区の通称セメント通りにコリアタウン構想が持ち上がったのは、1992年である。この構想のモデルとなったのが繁栄していた横浜中華街である。筆者は、朝日新聞の記者から川崎コリアタウン構想についてコメントを求められた際、「歴史的背景から日本人は朝鮮文化を中国文化より下に見ていた。それが、最近のエスニックやグルメブーム、ソウル五輪で、若い世代を中心に見方が変わってきた。そのことを在日の人たちも感じとっているのだと思う」と答えた¹⁾。

生野コリアタウンや大久保コリアタウンの近年の賑わいをみると、在日コリアンに対する従来からの差別・偏見は、幾分は解消されてきたように思える。このような差別・偏見の壁を破ったのは、2003年に始まる韓流ブームで、その主体は中高年の女性と若者であった。焼肉・キムチのイメー

ジに凝り固まった中高年男性ではなかった。それが、今日のコリアタウンの景観や土地利用にも顕著に反映されているといえよう。

エスニック資源を積極的に活用して、観光地として発展した好例として挙げるができるのが、横浜・神戸・長崎の日本三大中華街であろう。筆者は本特集号に掲載されている「日本における地域活性化におけるエスニック資源の活用要件」の中で、観光地として特に発展している横浜中華街を参考にした「屋内型中華街」構想などを検証した。そして、横浜中華街がエスニック資源を活用した地域活性化に成功した要因について考察した。その結果、日本に限らず世界においても、地域活性化のためのエスニック資源の活用においては、エスニック集団、ホスト社会、そして行政の三者の役割および相互関係が、きわめて重要であることがわかった。

近年、増加する移民・難民に対して、ホスト社会の人々の反発が、世界各地でみられるようになった。根田克彦は「ロンドン、タワーハムレットにおけるブリックレーンの商業機能とタウンセンター政策」について論じた。バングラデシュからの移民が集中する大ロンドン庁のイーストエンドに位置するブリックレーンは、現在、ファッション・文化・エスニック資源により、ロンドンで著名な観光地の一つとなり、さらに、ストリートアートの拠点としても有名になった。そこに至る過程では、エスニックタウンのエスニック資源を積極的に活用し、観光地を形成しようとした自治体の役割の重要性が指摘されている。

地域活性化におけるエスニック資源の活用は、ホスト社会の人々あるいは他のエスニック集団をおもな対象とした地域活性化だけではない。同一エスニック集団を主要な対象とした例について、大石太郎はカナダのアカディアンを、石井久生はスペインのバスク人の事例を取り上げた。

英語話者が多数を占めるカナダでは、フランス語話者は少数派である。大石太郎は、カナダのフランス語話者の中でも、沿海諸州に居住するフランス語系少数集団アカディアンを対象に、「カナダ、沿海諸州におけるアカディアンの文化遺産を活用した地域活性化」について検討した。

ノートルダム・ドゥ・ラソンプション大聖堂が、マイノリティとして苦難の歴史を歩んできたアカディアンのレジリエンスの象徴として国指定史跡に指定された。このことにより、北アメリカ各地に居住するアカディアンの末裔によるルーツ・ツーリズムの観光客が増加し、地域活性化への貢献が期待される状況について、大石は考察した。アカディアンのエスニック資源が、多数派を占める英語話者にとって、今後、どのように受け止められていくのか興味深いところである。

スペインのバスク人を対象とした研究を続けてきた石井は、バスク州ドゥランゴにおけるブックフェアを事例に、「文化の祝祭にみるエスニック資源と地域活性化」について考察した。祝祭「ドゥランゴのブックフェア」で扱われるすべてのコンテンツは、バスク語やバスク文化に関わることである。バスク市民の間では「バスク地方最大の文化的祝祭」として認知度が高い一方、バスク地方以外での認知度は低く、域外からの参加者はほとんどないことが特徴である。このブックフェアは、州政府のバスク文化復興政策と連動してバスク文化の復興と発展に寄与し、バスク語話者コミュニティの再活性化という文化的地域振興に貢献しているという。

長年、アメリカ合衆国の移民社会について研究してきた矢ヶ崎典隆は、「ロサンゼルス大都市圏におけるエスニックタウンとエスニック資源の活用」について論じた。その中で、エスニック社会を読み解くための視点と方法を提示し、エスニックタウンの動態をエスニック資源の活用に着目し

て検討している。アメリカ合衆国の華人社会やチャイナタウンを研究してきた筆者にとって、矢ヶ崎が示したエスニック空間の占拠形態、エスニック組織、エスニックシンボル、エスニック博物館、エスニックフェスティバルなどエスニック社会を読み解くための12の指標は、非常に納得のいくものである。

アメリカに限らずエスニック博物館の建設においては、自分たちのエスニック文化の伝統を継承したい、子孫にエスニック集団が歩んできた歴史を伝えたいというオールドカマーの役割が重要である。エスニック集団内部のオールドカマーとニューカマーの意識、移住先での適応様式の違いなどについても注視していく必要がある。

本特集号が目指してきた地域活性化におけるエスニック資源の活用というテーマは、まだ研究の蓄積が少ないといえる。国内外を問わず、各地において事例研究を積み重ね、それらの中から成功事例、失敗事例などの要因を深く分析し、それらの一般化、モデル化などを図っていくことが重要であろう。

最後に、本特集号の著者・タイトル一覧を記載する。

- ・山下清海：地域活性化におけるエスニック資源の活用に関する研究の意義 - 特集号の趣旨 -
- ・矢ヶ崎典隆：ロサンゼルス大都市圏におけるエスニックタウンとエスニック資源の活用
- ・大石太郎：カナダ、沿海諸州におけるアカディアンの文化遺産を活用した地域活性化 - ノートルダム・ドゥ・ラソンプション大聖堂の史跡指定を中心に -
- ・根田克彦：ロンドン、タワー・ハムレッツにおけるブリックレーン商業集積地とタウンセンター政策
- ・石井久生：文化の祝祭にみるエスニック資源と地域活性化 - スペイン・バスク州ドゥランゴに

におけるブックフェアの事例－

- ・加賀美雅弘：オーストリアにおけるロマのエスニック資源活用の可能性
- ・福本 拓：韓流ブーム下での大阪・生野 코리아 タウンの変容－エスニック・タウンの価値と地域活性化－
- ・山下清海：日本における地域活性化におけるエスニック資源の活用要件－中華街構想の問題点と横浜中華街の実践例を通して－
- ・山下清海：地域活性化におけるエスニック資源の活用－特集号の総括にかえて－

[付記]

本特集号の研究は、2017～2021年度日本学術振興会・科学研究費補助金基盤研究(B)「地域活性化におけるエスニック資源の活用の可能性に関する応用地理学的研究」(課題番号17H02425, 研究代表者: 山下清海)の研究費の一部を使用したものである。

注

- 1) 朝日新聞1992年11月15日朝刊「同胞からエール続々 川崎のコリアン・タウン構想(時時刻刻)」。

The Utilization of Ethnic Resources in Regional Revitalization: Instead of Summarizing the Special Issue

YAMASHITA Kiyomi

Faculty of Geo-Environmental Science, Rissho University